



啓蒙すてちまおう

Do what you want!

R-18 71再録集②

ささむ



もくじ

- | | |
|---|------------------------|
| 一 | 麻婆豆腐はどうでもいい |
| 二 | ベイベーおービバビバ！ |
| 三 | 三十歳まで童貞だと魔法使いになっちゃうらしい |
| 四 | 譲れそこの哀れ者 |

※この本には R-18 作品が含まれています。

18 歳未満の方の閲覧は固くお断りいたします。

もくじ

五

届かないなら言えるだろうか

一歩目 憂いる男パクジミン

二歩目 ミンユンギと不憫な週末

三歩目 チョンホソクは自滅する

四歩目 やましい情緒はキムテヒョンと

五歩目 unknown キムナムジュン

六歩目 焼肉しゃぶしゃぶチョンジョングク

最後の一步 届くように言わせて

六

ぶちぬけアンダーコントロール

七

啓蒙すてちまおう

—

麻婆豆腐はどうでもいい

この麻婆豆腐にどう決着をつけようか。

大皿の脇、レンゲの上で重なる手と手。甲から相手のタトゥーを追って恐る恐る視線を動かしていくと、子鹿のような瞳が僕を捉えた。視界の端で感じ取って、本能で目を閉じる。ごめん、しょうがない、申し訳ない。だって今少し上を向けば絶対に目が合ってしまうから。

歳下だしちょっとウサギみたいで可愛いし、たっぷりご飯をあげたい母性が心の内をノックしてくる。でも駄目だ。そんなのきつと見せかけで、こいつは強欲で貪欲な飢えただけの獣。その証拠にこの後輩は、僕の手を潰さんとばかりにレンゲへありつただけの握力をつぎ込んでいる。

僕にだって譲れないものがあるんだ。お前がどんなに見つめてきたって、このレンゲは手放さないからな。

「あ！いたジンヒョン！急ですけど今日の夜空いて」

「空いてない」

土曜日の昼下がり。炭水化物サークルの部室に勢いよく転がり込んできたのは後輩のジミンだった。荒れた息でやっぱりか、と肩を落とされる。頼むからそんなに気落ちした素振りを見せないでほしい。ていうか僕が今まで合コンの誘いをオッケーしたことなんてなかったんだから、元からそこまで期待をかけないでいてほしい。

今回はジミンの親友であるテヒョンがメンバーを半分集めるようで、推定されるレベルの高さにこいつはすっかり息巻いていた。自分の狩りの邪魔をせず、かといって相手側をガツカリさせない品揃えを用意しなければならない。ジミンは一週間前から人脈を端から掘り起こしメンバーを招集していたはずである。

当日かつ直前、この期に及んで僕に声をかけて来るということは欠員でも出たんだろう。かわいそうに。だけど僕には関係ない。

「やっぱり恋人ですか」

否定するのも面倒くさかった。毎度断るたび僕に言わせるこれは、もはや裏切っていないかどうかの確認じゃない。いないのを分かっている恋人の有無を聞いてくるなんて百パーセント嫌味に決まっている。

「そうそう愛しいパートナーが離してくんなくてさあ！ やー、銃器ぶん回したりカート乗り回したりペンキぶっかけ合ったり毎日よりアルが充実して困っちゃうよ。悪いかな？」

今日だってゲーム機にかじりついていた身体をなんとか家から引っぱり出して大学に来たのである。束縛が強い恋人を家に置いてきたこの偉業、もっと褒めてくれてもいいと思う。ちなみに僕のことを好きすぎて、ナップザックにはお留守番できなかった小型ゲーム機が二人鎮座ましまして。こちらとら院生最終学年。知り合いが大学に残っていることも少ない。だから今はこいつら……とジミンだけが僕の友達だ。哺乳類が一体しかないこんな貧弱人脈、どう愛を育めというのか。

「ヒョン友達いないんだからこういう出会いの場大切でしょ！」

まずは人脈を育めと。至極真つ当な理論。でもなあ、正直言って面倒臭さが勝ってしまうのも事実。

初めて共学となった大学一年生で自覚したけど、僕は顔がいい。それで身長も高くてイケメンだから、女が寄ってきやすい。ギャグセンスも高くて顔の造形が整っているから、かなりモテてしまう。気づけばSNSには大学が同じだけのアカウントから無数のフォロリクが送られてくる。週末の予定を毎日聞かれる。全部まとめて感想、面倒臭い。

必要とあらばいつでも恋人を作れるステータスなのは死ぬほど分かった。つまり恋人という存在に目的も利益も感じていない今、焦って消耗する必要全くなし。

「友達いない僕の前までお前が二人分頑張りな」

ちなみに今日はちゃんと直帰したい理由がある。申し訳ないけど、僕には明日発売のゲームソフトの前シリーズを復習するという使命があるのだ。

「じゃ、そろそろ帰るから部屋戸締りよろしくね」

待ってるエーペックス！ いそいそと上着を羽織り、中学生から使っているナップザックを肩にかける。十年前より背中が倍近く広くなってしまったからリュックとしては背負えないけど、片方の肩に引っ掛ければほら、ぱっと見はショルダーバッグだろ。

出て行こうとしたところでグッと抵抗力がかかった。胴体に細っこい腕が巻き付いている。

「頼みます本今日だけ……！ テヒョンイサイドに例の子いるんですよ!!」

「あー、ずっと通学電車の車両一緒だからってお前が舐め回すように見てる奴？」

「見てないですけど!? なにその僕きつも」

「これからは目尻と人中少し引き締めなね」

軽口を叩いていると、腰へ手を回したままのジミンがふいに力をこめてきた。

「……ヒョン、また痩せたでしょう」

さては新作のゲーム買うためにまた食費削りましたね、とワントーン落とした声で凶星を突かれた。さっきまでと違う低音ボイスがちよっと怖い。

「ちゃんと食べてるよ？」

「今日の朝ごはんは何でしたか」

「ささみ」

「じゃあ昼ごはんは」

「ささみ」

「……夜ごはんは何を食べるつもりですか」

「ささみ」

「ヒョンはカムバ前のアイドルですか」

「ささみ」

しくった、と顔を顰めたときにはもう遅かった。これでは早く帰りたいがために返事が適当なのがバレバレだ。いつのまにか首に回っていたジミンの腕にはだんだん力が入り、僕の頸動脈が悲鳴を上げ始める。不気味なほどに優しい笑顔が近づいてきて、それからぼろと耳元で囁かれた。

「ヒョン、どっちがいいですか？」

締め落とされるか、夜をジミンに明け渡すか。金がないという言い訳も、ヒョンの会費は払いますから、と優しいままの声に封じられた。

ここまで追い詰められて気絶を選ぶような奴はきつと、最初から部室になんか寄らず帰っていたんだろうな。僕は力なく両手をバンザイした。

結論から言つて、ジミンに感謝をすべきかもしれない。

連行されて辿り着いた店は評判の中華料理屋だった。回鍋肉、エビチリ、八宝菜に羽根付き餃子。席にはメンツが揃うより先に色彩豊かな料理がずらりと並んでいる。口コミがいいだけのことはあるな、なんて卓上に心を奪われたのがよくない。気づけばジミンは目当ての女の子に声をかけに行き、そのまま楽しそうに話し込んでいた。あいつ、この場に僕の知り合いがお前しかいないってこと完全に忘れてやがる。

人数は両手で数え終わるくらいだ。埋まった椅子の数から見ると、ある程度はすでに席が整ったのかもしれない。参加者は全員お喋り……の皮で装った乳繰り合いに夢中だった。とってつけたような趣味を語ったり、指先がテーブルの下で蠢いたり。大変そう、なんて青春のカケラもない感想を抱きつつ、長机の端っこに席を取る。

ちようど女の子が一人まだ来ていないみたいで、男、かつ眼鏡にモサモサのセーターで相

乗効果を生んだ奇跡の僕が一人余っていた。おかげで今のところ全員に空気扱いされている。いいもん別に。ただの数合わせにできることなんて、誰も箸をつけない中華料理を自分の胃袋によそっていくことくらいだろう。数日脂身のない鶏肉ばっかだったんだ。美味しい料理が食べられるなら万々歳。……春巻きも頼もうかな。

「あの、もしかして『ジンヒョン』ですか？」

心地いいテノールの声に呼ばれて振り向くと、そこには色塗りまで終わった彫刻……ではなく一人の男がいた。ジミンがいつだか見せてくれたツーショットで覚えている。この子がもう一人の主催者、キムテヒョンだ。

「テヒョンさん……だよね。はじめまして、ジミンと同じサークルのキムソクジンです」

初対面のはずだ。けれど、不思議と旧知の仲であるような親しみやすさを感じた。にこりと笑顔を交わし合ってお辞儀もして、一通りの挨拶を終える。

目線を外そうとしたところで首を傾げた。テヒョンがずっと僕の前に突っ立っている。

「ジンニョンはあっち行かなくていいんですか？」

目配せされた奥の方、テーブルの盛り上がっている辺りをぼんやり眺める。どうやら彼は僕が馴染んでいないのを氣遣って、わざわざ声をかけに来てくれたみたいだった。なんだか申し訳なくて、ただの数合わせだと白状する。するとテヒョンはほっとしたようにまた優し

く微笑んだ。

「実は今日、おれの後輩にも数合わせで来てくれる奴がいるんです。……まだ到着してないけど」

「ああ、僕の正面ひと席空いてるもんね」

ぶっちゃけ遅れて来る子が心配だった。胸をときめかせながら座った真ん前で、喋る気配のない先輩がひたすら料理を頼張っていたら困惑以外の何物でもないだろう。良かった、数合わせ同士ならお互い気が楽だ。

「じゃあこの美味しい料理たち、せっくなのでお腹いっぱい食べてってくださいね」

僕の目的を解釈し直したであろう、その一言に思わず頬が緩む。目を合わせてこくりと頷き、再び箸を握りしめた。

ジミンに感謝だ。人の金で腹いっぱい食べる中華は世界一美味しいと決まっている。

最後の春巻きが容易く飲み込まれていった。

美味しそうなメニュー写真に惹かれて、トイレに寄りがてら店員さんへ三人前を頼んだの

は記憶に新しい。つい数分前の出来事。テーブル番号を伝えたら、ちょうど揚げたてがあるのですぐに持ってきてきます、と素敵な申し出を受けたはずなのに。

僕が戻ってきたら、長机には春巻きが一つだけ載っている不可思議な大皿があった。そしてたまげる暇もなく、見知らぬ青年がその最後の一本を箸で鷺掴み、口へ運んで……

「お、美味しい……？」

「ングッ」

突然話しかけたのは流石にまずかったか。頬をパンパンにしながら必死に胸を叩いていたので、慌てて自分の水を手渡した。それから恐る恐る背中をさすってみる。

「つぶは、あ……ありがとうございます」

人見知りかな。伏し目がちにテーブルを見つめたまま、代わりに深々とお辞儀をしてくれた。

「急にごめん。びっくりしたよね」

ふるふると首を動かす様子が小動物のようだ、と思う。この子の頬は未だ一本分の春巻きを飲み込むためにむぎゅむぎゅ動いていて、その姿もたいそう可愛らしい。

ただ、メニューには二本で一人前と書いてあった。

「もしかして春巻き全部食べちゃった？」

「……ごめんなひやい。あお、お腹空いてて。そういう場ひやないえすよね……すみません」

かける三。周りを見るに食事をしているのはこの子だけ。僕がお花摘みに席を立つたほんの数分でこいつ、揚げたての春巻きを六本も完食したというのか。それってなんだかとても……

「僕たち同類じゃない？」

「え」

「もしかして君、えっと」

自分の席に戻り、さっきまで空いていた席、つまり僕の正面に座っている彼をちろりと見た。

「ジョングクれふ。チョン、ジョングク」

「じゃあジョングガ。僕の予想だけど、多分おまえも数合わせだよね？」

「も？……あ、なたもですか？」

重々しく頷いてみせる。するとジョングクは途端に胸を撫で下ろし、僕と目線を合わせてきた。

「よかった、俺こういう場慣れてなくて。テヒョンイヒョンに言われて来たはいいんですけど、別に女の子と話したいわけじゃないから暇で……。しかも料理、みんな箸つけてないし。せっかくタダだから俺は一人でじゃんじゃん食べちゃおうかなって……」

「ちょ、言っとくけど僕と半分こだぞ」

澄んだ瞳が瞬いて、それからジョングクはくふりと楽しそうに笑った。覗く前歯がやつぱり小動物のようだ。あまりの愛おしさに、男女比的には女子が来るべき梓だったんじゃないの、なんて頭の端でちらついていた素朴な疑問は秒で通り過ぎていった。

のんびりとジョングクの咀嚼を眺めること十数秒。ようやくからっぽになったジョングクの口元はなにかを言いたげにもにやもにや動きだす。

「あ、名前……つと、僕はキムソクジン。好きなように呼んで」

「じゃあジン、くん？」

わしり、と心臓を握られた。

「……っ、おお、やー堅苦しいな。友達には……よくソクジナって呼ばれるからそれでいいよ」

「わかった、ソクジナ！」

可愛いお返事にここで懺悔、超嘘っぱち野郎はこの僕です。今犯した罪は二つ。

ひとつ、僕をよくソクジナと呼ぶオトモダチはどこにいますんだおい。ジミンからはヒョン呼び、ネット上のいわゆるフレンドとはお互いユーザーネームしか明かさなない。同級生の友達だってこの頃みんな研究室に籠り続けているから、そもそも顔を合わせる機会ナッシング。

こっちが本題、ふたつめ。当然ながら僕はジョングクの同級生ではない。つまり本来は呼び捨てをされるべきじゃないのだ。大三のテヒョンをヒョン呼びしていたからジョングクは多分大学一、二年生。そんなに僕は童顔か？ ちよつとシヨック。

うーん、僕が六年生なの、二十代前半の端っこにいるの、知ったらびっくりするだろうなあ。でも今更白状もできないっていうか。舞い上がって「ソクジナでいいよ」とか言っちゃったもんだからタイミング逃したうえに、せっかく開いてくれた心が萎縮で閉じてしまいう。

「ソクジナ、お互いごはんたくさん食べようね！」

「リア充どもの会費かさ増ししてやろう、ジョングガ」

うん、ちょうど気安い仲が恋しい頃だった。今日は童心に帰ってみよう。

「ね、ソクジナソクジナ。テーブルの奥んとこにある麻婆豆腐、余ってるんだけどもらって

もいかなあ……」

「いいんじゃない？ あいつら食う気ないでしょ。皿ごと奪ってこい」

「アイアイサー」

言うが早い、ジョングクは素早い身のこなしであつという間に大皿をかつさらつてきた。ちゃっかり新しいレンジと取り皿まで抱えている。やるな。

「ジナの分もよそう？」

「あに、僕は先にエビチリを片付ける」

「じゃあ俺食べるね」

僕は海老を食べるのに夢中だったから、適当に左手をひらひら上げて了承の意で応えた。なんせ大皿だ。急がずとも後で一口くらいもらえらるだろう。

一度で三匹分を口に突っ込んで、咀嚼の間に辺りを見回す。少し前から、ただでさえ沸いていたジミン側がさらに賑やかになった気がしていたのだ。美味しい料理でもあつたんだろうか。

「あーテヒョンイには飲ませたらだめだつて！ コイツびっくりするほど酒弱いんやぞ」

「ジミナ！お願い、一滴だけだから！」

「僕はおまえを持ち帰りたくて来たわけじゃない」

「そんなあ……」

仲良し二人組の押し問答に周囲がきやあきやあ盛り上がっている。

なるほど、そういえばアルコールの存在をすっかり忘れていた。久しぶりに飲みたい。だつて中華だぞ。脂質たっぷり濃い味付け、そんな烏龍茶ちびちび飲むより断然ビールがマブダチコンビじゃん。そんな子供にはこう、ビールの爽やかさを引き立てるような、辛くてコッテリしてて肉肉しいやつがきつと合うはず。

エビチリは美味いけど物足りない。ぐるりと卓上を眺め回す。おお適任発見、お前がいたか麻婆豆腐！

「……ジナ。その手、どかしてほしいんだけど」

——さつきから似た者同士だとは思ってた。

手を伸ばしたタイミングまで一緒だった。

「……被せてんのはジョングガだろ。見ろ、僕が先にレンゲ握ってるじゃん」

「あに、俺がよそおうとしたのに横から滑り込んできたんだって！」

「滑ろうが弾こうが掴んでた方が勝ちなの！……って、え、待って僕視力落ちたかもしれない」

「なに？」

「もうこれひとすくい分しか残ってないように見える」

「あに、半分くらいじゃない？」

「いちもないのかよ」

ダイソンも裸足で逃げる吸引力である。ちょっと目を離れた隙に食い尽くしかけているなんて、さすがに予想の範疇を超えていた。

「俺、食べるって言ったよ」

ああその通り。僕だつて了承した記憶はある。でもまさかウン人前を平らげる宣言だとは思わなかった。

「じゃあたらふく食べたろ、残りは僕に譲ってくんない？」

「大切なのは過去より今だから。俺は今これが食いたいの」

……なかなか生意気。食欲に忠実なかわいい奴だとすっかり思い込んでいたけれど、これでは従順どころか手綱を振り切っている。

どう見たって僕の方が先にレンゲを握っているのに、相変わずジョングクの右手は僕の手に被さったままだ。しかもジョングク、ご自慢らしい握力でみしみしとレンゲ権を主張している。僕は痛みで引き攣る頬を必死にごまかした。代わりに指の関節同士を引き寄せて、ジョングクの手の裏の皮膚をつねる。

こうなると意地だ。お互い譲れない。

「いっ……っ一口くらいくれたっていいだろ」

「さっきまでエビチリ食べてた浮気者のくせっイダダ」

「エビチリじゃ酒と合わないんだって！」

「……酒、？」

唐突に、ジョングクの手から力が抜けた。

「うん、麻婆豆腐くらい味濃くないと」

停戦の気配を見出して、僕もレンジとギシギシに癒着した手のひらを少しずつ動かしていく。そのままグーパーの仕草を繰り返していると、眉を顰めたジョングクから控えめな声がかかった。

「……ジナって、見かけによらずヤンチャ系？」

「は、はあ？」

「もしかして服の下、ピアスとかタトゥーとかバチバチだったり」

「やー！急にめくるな寒い!!」

がばりと剥ぎ取られそうになって、必死に服の裾を押さえる。慌てて左耳にピアス穴があるだけだと説明した。一体なんの確認だよ、若い子にはついていけない。

「ていうかタトゥーもピアスも性格関係ないだろ……」

ジョングクの右腕に広く彫られたタトゥーをちゃんとつつく。会ってまだ小一時間だけど、その丸っこい瞳からは純粹無垢な性格がありありと伝わってきた。いい反例がここにいるっていうのに棚上げて何を言ってるんだか。

「そもそも見た目じゃお前の方がいかつい」

「でも俺は法を破ったりは……。ジナなんていかにも規則守りそうだったから意外」

「いや現在進行形で健全真っ当だから」

スパイシーな人生歩んでる奴みたいない方やめてくんない？ 思わず顔を歪めると間拔けな顔を返された。

「だってさっき言ってた感じだと、麻婆豆腐は酒のつまみに食べたいんでしょ」

そののどこが何に抵触してんのか頼むから教えてくれ。麻婆豆腐はお米のお供以外許しません委員会ですってか。じゃあ日本酒頼んでやりゃあ満足か、お？

「ジナ、教えてあげる」

ぐっと声のトーンを落として囁くものだから、自然と顔を寄せあうことになった。

「あのね」

「な、なに？」

「お酒はハタチになってからだよ」

.....

「.....うん、まあ常識だよな」

一と一を足すと二になるんです、と言われても同じ心境だっただろうな。そのお綺麗な後頭部をはたいてやろうかと思った。でも我慢した。目の前の男があまりにも真顔なもんだから、馬鹿にされているのか真面目にいくさっているのか全く判別がつかないのだ。

もしかして僕、同級生どころか後輩だと思われるんじゃないだろうか。だからお前は酒飲んじやいけないよって先輩としての注意をされたのかも。そんなに見た目若いなんてなんだかアレンチエイジング界に申し訳ないな。明日からは前髪上げてこようかなあ。

と、ここまで思考が巡ってふと引かかる。それなら後輩（勘違い）の僕は先輩（勘違い）のジョングクにめっちゃくちやタメ口叩いてたことになるんだから、そっちを先に説教するべきだったよね。僕は十代の設定らしい、するとジョングクはハタチか。二人とも二年生で同期ならともかく、歳上には敬語を使えって。

……同学年ならともかく。

………ちょ………っと待てよ。

「ジョングガ……お前いくつ？」

「？十九だけど」

カウンターパンチ一発！

ティーンエイジャー！?

あまりのショックに茫然自失、開いたまま塞がらない口は鯉の如く。

えっジョングクも十代なんじゃん、大学一年生じゃん、未成年じゃん。ピアスにタトゥーでばちばちな装いだからまさか新入生だなんて考えてもみなかったけど、そりゃあ酒も飲めないわけだ……。

重要なのはここからだった。いつのまにかテーブルの端にはキンキンのビールが届いている。ほんのり暖房が聞いた店内で、独りぼっちのジョッキは既にうっすら汗をかき始めていた。ああ、飲みたい。今すっつごい飲みたい。だがしかしジョングクの視線がビシバシと刺さっている。すっかり同じ十代だと思われる今、まさか堂々と法に背くわけにもいくまい。つまり、誤解を解くまでこいつはお預け同然ということである。

友情を取るか、アルコールを摂るか。僕に残された選択肢はたったひとつだった。

「やー……未成年の飲酒は、よくない、よね」

久しぶりに名前で呼んでくれる友達が出来たんだ。顔目当てじゃなくてただ純粹に懐いてくれた。ここで心の距離ができたら最後、ジョングクはきつともう気軽にジナと呼んではくれないのだ。酒なんか飲みたきやいつでも飲める。

伸ばしかけていた腕を引っ込めると、彼は満足気に頷いてふわりと僕の手を包み込んだ。
「ジナ、きつとぶどうジュースも美味しいよ」

味音痴か？ 麻婆豆腐にはどう考えたって合わないだろ。喉まで出なかった言葉を飲み下してこくと頷いた。そのときだった。

「僕のお金でちゃんと呑んでますかあ？」

「ジョングクが横ずれて！ おれも仲良くなりた〜い」

肩をしっかりと組みながらダル絡みをかましてきたのはジミンとテヒョン。アルコールに頬を染めた酔っ払い二丁のお出ましである。あれよあれよという間にテヒョンはジョングクの隣に収まり、ジミンは僕の後ろに立って背中にしなだれかかってきた。

ゆっくりと伸びたジミンの腕は肩越しにテーブルのドリンクメニューを拾い上げ、アルコール欄を開いて僕をチョンチョンとつついてくる。無言の圧力。まだまだ飲み足りないらしい。座るなりジョングクに体重をかけ睡魔と戦い始めた親友とは違って、こいつは細めた目

の奥に余裕が見て取れた。かくいう僕も酒には強い。どれにします、なんて度数強めのページを指したジミンに囁かれれば、思わず喉仏がごとりと動いてしまう。

「ジナ」

ギクリ。

「ソフトドリンクはそのページじゃないでしょ」

うへえ、僕は今未成年なんです。渋々頷いて無言でテーブルの端を指差す。感謝しろジナ、本当はそれ僕のビールだったけど譲ってあげる。

僕のメッセージを正しく受け取った後輩はさっそくジョッキを捕まえて、それはもう美味しそうにぐびぐび嚙下音を立てた。

「ツカ〜うつま。でも僕これじゃ度数足りんわ、残り飲んでいいですよ」

「ジナ」

「ぼぼ僕はやめとこつと」

怖い怖いその鋭い目線なら鶏皮すら気持ち良く切れる。名前を呼ばれるだけの端的な牽制だったけれど、飛びかけた理性を取り戻すには十分すぎた。今すぐジョッキに飛びつきたい右腕を必死に抑え込む。が、なんならガツと一杯いつときやよかった。

素早い動きで一瞬、とかなかったらバレないかもしれないなかつた。

「ジンニョン遠慮しなくていいんですよ。むにや。んん、おれ、ジミナとおんなじくらいの酒豪だつて聞けるし……スピー」

テヒョン、寝落ち。とんでもない爆弾を残して。

「ジン、ヒョン……？」

「……………ジョングガ、料理冷める前に食べよう」

「テヒョンイヒョン今、ジナのことヒョンって」

「麻婆豆腐やっぱり食いな、ほら」

「そーいやジナ呼び珍しいですよ。この子テヒョンイの後輩でしょ、実は五浪くらいしてるんだ？」

「やーお前は黙ってビール飲んでてくれる!？」

その一言は絶対わざとだろ。平然と後輩が触れた学年問題は、テヒョンの爆弾を揉み消そうと躍起になっていた自分が馬鹿らしくなるほどの大暴露だった。当のジミンはアルコールと二人三脚、ふわりと口角を上げてこちらを見つめている。確実に悪気百パーセント、僕なんかお前に恨まれるようなことしたっけ？

もうビール飲みたいなんて惚けてる場合じゃない。

「ジナ……ジンヒョン」

呼称が変わっただけなのに、心の距離がするすると遠くなっていく気がした。

「一たす五……六年生？ 院生なんですか」

サバ読んで不自然じゃなかったのは見た目だけで、実際合コンで年齢詐称なんて普通にドン引き案件だと思う。しかも大胆に五歳。僕は静かにうなだれた。

「僕の心はまだ十代だから大目に見てくれない……？」

「でも実際は二十四ですよ」

「せめて笑ってほしかった……」

顔を見られないのでジョングクの感情が分からない。嘲笑か軽蔑か知らないけど、あのベビーフェイスが負のリアクションを浮かべていたら心臓はタコ殴り間違いなしだ。僕の脳みそでは既に、様々なシチュエーションをシミュレートしては素早いジョブが打ち込まれていた。

すうと空気を吸い込む音がして、断罪の瞬間に肩が強張る。

「わあ、俺も早く大人になりたいです……！」

がばりと顔を上げると、そこには瞳に星を湛えた尊敬の眼差しがあった。

「ジンヒョン、来年からシャカイジンですよ」

「お、お」

「うわあかつっこいい……!」

覚悟以下、というよりむしろ斜め上の反応である。啞然呆然、再び鯉が憑依。これはちょっと、守備範囲外だった。

きらきらお目のジョングクは、何に惹かれたのか唐突にテーブルへ身を乗り出す。そうして迷子だった僕の両手をわしりと包み込んだ。

「つてことは先が尖った革靴を履くんですね」

「ん？」

「エイギョーのときは茶封筒を脇に挟むんですね!」

「んん？」

「スーツの下に、ジレ着ちゃったりするんですね!」

「ジ……?」

やばいやばい何だジなんちゃらつて。ボールペンの社会的な社会人の必須アイテム? 大学のキヤリアセミナーじゃ教わらなかったから明日どなたか教授に聞いてみよう。実は教わるまでもなく世間の常識だったのかもしれない。

ともかく、なんだこの高揚っぷりは。

「……あれ、ジンヒョン?」

僕がジョングクの勢いに押されてどまる様子は不審だったようで、まあその八割方はマシンガンクエスチョンを放ったジョングク自身のせいなんだけれども、この子は眉を顰めた。こいつ本当にシャカイジンか？と可愛いおつむを総動員して訝られている。僕のことを人間の皮を被った宇宙人だとも思っているんだらうか。

「ジレかあ、着ることもあるかも。ね、ジンニョン」

ここで奇跡的に救世主テヒョン、お目覚めである。

「う、うん毎日じゃないけど着るかな」

ジレって衣服の一種なのか。なら毎日同じ服を着る奴もステイプ・ジョブズ以外なからう、ということよく当たる占い師みたいな相槌。なんとかこくこく頷いてみせた。するとジョングクはとたんスツと目を細め、微笑みながら手前の皿を勧めてくる。

「ジンヒョン、ぜひこの麻婆豆腐食べてください」

「え、いいの？」

「はい。お酒と合う食べ物、どうせなら呑める人に味わってほしいですから」

「ジョングガ……おまえってやつは……！」

さっきまで目線ひとつで僕に釘を刺していたとは思えない。寂しいような単純に嬉しいような感慨に浸っていると、彼はどこからか小皿を取ってきて、いそいそ残りの麻婆豆腐をよ

そつてくれている。

「はい、どうぞ」

ひとすくいの麻婆は抜群の起爆剤だった。

元からお酒が強いこともあり、アルコールの場についてつけない中華料理店では水を得た魚である。じゃんじゃん飲んでくださいね、と目の前のかわいい友達に許可をもらった僕は、ジミンと魚同士競うようにオーダーを飛ばして、ジョッキを傾け続けて、それはもうガバガバ飲んで、……

ジミンは僕よりも少しだけお酒に弱かった。彼の顔色がすこし危ういな、と思つて手元のグラスを奪つて代わりに飲んでやったことは覚えている。

結局締め段階でデヒョンとジミンが爆睡してしまつていたから、僕が三人分の会計を背負つたことも覚えている。

ジミンが狙つた子は結局別の男とホテル街に消えていった。タダどころか三倍払つて食つた中華のおかげで腹は満杯、財布は一転すっからかん。マジ何のために来たんだろう、と隣のジョングクにぼやいたことも覚えている。

なぜそんなジョングクと今、ふたりきりでタクシーに乗って息のかかる距離で会話しているのか。アルコールにふやけた意識はなかなか理由を思い出してくれない。

黒い景色に浮かぶ街灯が、前から後ろへすうすうと流れていく。

ジョングクがすみません、と耳元に吹き込んでくる。ちよつと、あれ、距離感おかしいと思ってるの僕だけかな。空気動いたの肌で感じちゃってるの、なんか深夜の湿度っぽくて危ない、とか気にしてるのは僕だけなのかな。

「テヒョンイヒョンの分は俺が払うべきでした」

「や、大学六年の貯蓄って無駄にデカイから気にすんな」

「それに……ヒョンのお家泊まらせてもらうことになっちゃってすみません」

「……や、……え？」

あの、だからあまり覚えがないんだけど。

話しながら僕に向かって首を斜めにぐつと傾けてくる。シートベルトで制限がかかっているものの、なんだかその動作は深々としたお辞儀に見えないこともない。寄ったつむじをぼうつと眺めていると顔が上がった。

「おおやあ、そんなこと言ったっけ……？」

「テヒョンイヒョンとジミニヒョンが押しかけたアパート、俺は知り合いじゃないから頼るのさすがにお断りしたじゃないですか。そしたらあなたが、じゃあジョングギはどうするの？ って聞いてきて」

「あーあれは覚えてる、けど」

解散した時点で終電はとうになくて、そんなときジミンが近くに住む知り合いの家を頼るのはいつもの流れだった。

今回はダンスサークルで仲良しの先輩らしい。玄関先でジミン越しに話ただけでも分かるほど、ポジティブなオーラにあふれて優しそうな男性。口をへの字に曲げながら、どうせなら全員泊めてあげたいけど二人分布団が足りないかもしれない、と僕たち四人を数えて申し訳なさそうに頭を掻いた彼に、元から泊まる気のなかった僕は率先してお気持ちだけ受け取った。あんまり人の家で生活するのは得意じゃない。こういうのは上っ面でない人脈を広く育んでいるジミンだからこそ使える終電後の乗り切り方であって、大学に哺乳類一体しか友達がいらない僕にとっては悲しいかな、いっさい馴染みのない文化である。

そうして残り一つとなった柁も、ジョングクからしてみれば先輩かつ圧倒的に意識のないテヒョンを優先するべきなのは明白だった。

宙ぶらりんになった二人で歩道をなぞりながら、「ジョングギはどうするの？」と尋ねた記憶は、そういえば、ないこともない。

「あに、普通にさ、ネカフェとか行くと思っただよ。まさか自宅行きのタクシーに平然と乗り込んでくるとは思わなかったよ」

「うそ、いいって言われましたよ俺。……迷惑でしたか」

目を覗き込まれて、こっちの疑問符が端からアルコールで燃えていく。かち合った目線に色をつけるなら真っ白、あるいは透明、混じり気のない純粹さ。

今日はいつもより酒量の管理がぞんざいだった。それはジョングクと喋っていたら楽しくてふわふわしてつい、自分の限界を踏み越えてしまったから。酒で溶かされて、意識が曖昧になるような酔い方をしたのは久しぶりだ。

うん、楽しかったんだよ。ジョングクが酔った僕を揶揄っている様子はない。こうして家に転がり込むうとする中で、僕に悪い企みを仕掛ける理由も特段思いつかない。十九歳男児を真夜中に放り出す勇氣もない。

「……一人暮らししてから友達を泊めるっていう文化と遠かっただけで、別に泊められない事情はないから、うん」

それに、と心の中で続ける。

それに、もうちよつと一緒にいたい。

「っほんとですか、よかったあ……！」

お札を言われ、同時に手をぎゅつと握り込まれる。麻婆豆腐のレンゲを持ったときぶりに触れたな、と手元を眺めていると、ジョングクの指先は僕の手の甲をするりとなぞってそのまま肘、二の腕、肩、首先まで伝ってきた。

「じ、じょんぐが……？」

「ふふ、ひょん」

これで朝まで一緒ですね。

耳のふちに触れたジョングクにそう吹き込まれて、あたたかい手は僕の頬を包み込む。一瞬跳ねた肩にちらつとやった彼の目線は、このときはじめて、まっさら以外の色を宿していた。

[Tae side]

年上美人が好きなんで、と後輩は吊り革をはじいて顔をしかめた。

「うわっじゃあまずいから。あ、でもそんならキャンパスライフとかパラダイスでしょ。四分の三は年上じゃん」

「だと思っでしょ？ 俺だって最初はそう思っでました。でもなんか……」

大学生ってみんな同じに見えませんか？ となかなかの核心をついてきたのは、高校時代美術部の後輩だったジョングクだ。

吊り革に手首をまるごと突っ込んでいるわりに、彼はインナーマッスルもアウターマッスルも出来上がりすぎていていっさい揺られていない。

「まだ高校生の一歳差のほうがデカかった……」

「あれはあれでマジックだと思うけどねー」

なぜ後輩の好みを聞く羽目になっているかという、これは今夜仕上がる取引に重要であるからだ。

おれは高校卒業後、大学で文学部の芸術学科という珍しいゾーンに籍を置いた。こいつが

同じ大学に入ってきたって話を友達づてに聞いたときも、どうせ経済とか法とか商とかそこらへんだらうと思って大して気に留めていなかった。

だから夏の終わり、芸術学科しか使わない油絵くさい教室でジョングクと再会したときは指差して叫び合って、うわーとかいいながら跳びついてハグし合って、そこまではよかった。アツすぎる抱擁を受けたおれの肋骨にはヒビが入った。ほんと恐ろしい後輩だよ。

さすがにおれだって先輩としてのメンツがあるから治療費は自腹で出した。でも会うたびあんまりにも申し訳なさそうにペコペコしてくるもんだから、とうとう今日我慢ならなくなつて今後一切気にしない代わりに今夜合コンへ来いと誘ったのだ。実は一人キャンセルが出してしまつて、親友のジミンと同じ人数を連れてくる約束だったから困っていたのである。それが今、電車に二人で乗っている理由。

ところがやつぱり合コンじゃ骨との釣り合いが取れないと、ジョングクは吊り革をいじりながらうにやむにや引き下がってきた。そのためにかにこの会がジョングクにとってメリツトのないものであるか、参加することがいかにジョングクにとって苦痛であるか、ひいてはその痛みがいかに骨折の痛手と大差ないのか、おれは今必死に説いているのだ。

「今夜居るのはほとんどおれとジミニの知り合いだから、二個上ばっかだと思うよ」
「なおさらだめです。俺年上美人が好きなんで」

そして冒頭に戻る。ストイックすぎてめんどくさい。

「そのストイックさで育てた筋肉がおれの骨を折ったんだから、ストイックさを捨てること
がお前にとつての反省になるんじゃないの？ もういいじゃん楽しめば」

「うーん……でも……」

正直おれ的には本当にめんどくさくてもうジョングクが参加しようがしまいがどうでもよ
くなりかけていたけど、当日どころかもう中華料理屋に向かう電車の中だったし、ここで穴
を空けるわけにはいかない。

「ジョングク、おれって大人っぽい？」

「テヒョンイヒョンが……大人っぽい……？」

なんだその顔。予想通りのリアクションとはいえ鳩みたいな表情されるとなんかイラツと
くるな。

「ほら、じゃあさつきお前が言ったみたいに二個上の美人くらいじゃ年上美人にはなんない
よ」

「そうか……確かにテヒョンイヒョンの同級生なら別に、年上感はないですよね……」

「確かにってなんだよ、はったおすぞ」

「あんたが言ったんでしょ」

このときのおれは本当に何も知らなかったのだ。

まさかジミン側にも欠員が出て、それを埋めるために急遽用意されたのがこういう場に来ないことで有名なジンニョンだったなんて、どう考えても予想の範疇を超えている。

しまった、とびきりの年上美人。おれは店に着くなり頭を抱えた。ジョングクが途中参加でよかった。あいつは降りた駅名を確認した途端、確かここには滅多に寄れない画材屋があるんだかんだか言い出して、結局遅れての途中参加ということになったのだ。呆然として見送ったけれど今回ばかりは心底あいつの自由さに感謝する。

ジンニョンはおれたちよりも年上だ。そして挨拶して分かった、ジンニョンはとびきりの美人だ。こんな年上美人がいるとストイックなジョングクに知れたら、電車の中で必死こいて説得したおれの努力は水の泡……。

よし、ヒミツにしよう。決断には一秒も要らなかった。

「テヒョンイヒョン、遅れてすみませんでした……！」

「あーいいよ。それでさ、あそこに座ってる人……子わかる？」

「ああ、肩幅広い人ですか？ それがどうか」

「その正面がお前の席ね。お前と同学年らしいし、こういう場のノリ苦手みたいだから、喋

って友達増やしてきなよ」

見た目のよさは隠せないけど年上であることなら隠せる。いずれバレたとしても、おれが情報伝達をミスったせいでジョングクが年上ヘタメ口をきいてしまった、というマイナスカードを生み出せるから、なんとかジョングクの罪悪感と相殺できるだろう。おれってば頭脳派。

「――、僕が先にレンゲ握ってるじゃん」

「あに、俺がよそおうとしたのに横から――」

ちよこちよこ様子を見ていたものの、二人は順調に友情を育んでいるようだった。大喰らいコンビの手で大皿が何皿も真っ白になっていく。

そんなジョングクたちを見ていたらおれはすっかり気が緩んで、酒に弱いことも忘れてた。くさん飲んで、親友と肩を組みながらまたまた二人の様子を見に行つて、わージミニの先輩とおれの後輩が仲良くなつてゐるのうれしーってはいやいで、それで、

「ジンニョン遠慮しなくていいんですよ、むにゃ。んん、おれ、ジミナとおんなじくらいの酒豪だつて聞いているし……スपीー」

寝落ちた。自爆して。

「ッハ」

眠りから醒めて慌てて周りを見渡すと、頭上で飛び交う会話はとんでもないことになっていた。

「ジンヒョン、来年からシャカイジンですよね」

「お、お」

「うわあかつつこいい……!」

しまった……どう考えても手遅れのやりとり。ジョングクがジンニョンのことを正確にヒョン呼びしているのは間違いなくおれが口を滑らせたせいだ。無意識に手が胴体を撫でる。下手したら嘘をついた罪で肋骨もう一本やられるかも。とりあえず少しでも身の危険から逃れようと狸寝入りを決め込んでみる。

そのまま二人の会話に耳を傾けていると、次第にジョングクの声質が変わってくるのがわかった。

「エイギョーのときは茶封筒を脇に挟むんですね!」

「んん?」

「スーツの下に、ジレ着ちゃったりするんですね!」

目の前の美人が正真正銘の年上美人だと明らかになったことで、ジョングクはじわじわ高

揚し、興奮し、爛々としたオーラをまとい始めている。質問がアホすぎるおかげでジンヒョンには気づかれていない。でもジョングクの好みを知っているおれには分かる。まさか、お前まさかとは思うけど。

そうだ、ジョングクってストイックだけど草食なわけじゃなかった。美術部だったとき、キャンバスに剥き出した激しい情熱にぞっとしたことを思い出す。機会は逃さず、やるからには全力で。どちらかというと肉食獣に近いストイックさを秘めている、ジョングクはそんな奴だった。

膝の痛みでおれはぱちりと目を開ける。

後輩の恋路を応援せずにどうして先輩と名乗れようか。

「ジレかあ、着ることもあるかも。ね、ジンニョン」

ジョングクってすごいいいやつだし、優しそうなジンニョンとすぐ相性が良さそうだったから背中を押したのだ。決してテーブルの下で俺の膝をぱちこんと叩いてきた後輩に逆らって骨を折られたくないから、とかではない。

このあとアルコールにすっかりやられてしまったおれは飲み会の記憶をぜんぶなくして、

気がついたら知らない先輩とぴーすか寝こけるジミンと三人で川の字で寝っ転がっていた。うーんなんも覚えてない。まあ後でジミニに聞けばいいかと頭をぼりぼりかきながらそのまま大学に行って、学食で友だちとお昼ごはんを食べて、三限を受けた後、怒り心頭のジミンが芸術学科の教室で出待ちをしているところにはったり遭遇して、授業後のジョングクが親友に引き摺られていく場面を目撃するまでは至極平和に日々を過ごしたのである。

ミアネヨ、ジンヒョン。どうかお幸せに……。